第７回　ヴェールに包まれたマゲの研究

【今回取り上げる論文】
下家由起子（2008）
「現代に生きるマゲⅢ　～大相撲現役床山アンケートから～」
『山野研究紀要』第 16 号　山野美容芸術短期大学

●「秘技」として伝授される技

お相撲さんのマゲ（髷）を結う職業を「床山」（とこやま）という。

この論文は、そんな床山さんの生態に切り込んだ研究である。このような研究にいったいどんな価値があるんだ、というツッコミが聞こえてきそうであるが、この論文が掲載されている雑誌の名前『山野研究紀要』を見てピンと来た方がいるだろうか？　発行元は山野美容芸術短期大学、そう、あの山野美容専門学校の系列なのである！

そうか、美容の観点からの研究か！と納得してみたものの、それでも美容師はマゲを結えなくても生きていける。

しかし、日本古来の髪型であるマゲが、今では相撲の世界でのみ脈々と受け継がれているという事実は非常に興味深い。そして、この論文は、ゆくゆくは滅びてしまうかもしれない相撲文化のなかで生きる「床山」さんの実態を記述した、歴史的価値のある研究かもしれない。そう思って、実際に論文を読んでみることにしよう。

2008 年１月場所から、番付表に最高位の床山の名前が掲載されるようになった。しかし、それまでは、大相撲 300 年の歴史の中で床山が表舞台に立つことはなく、彼らはまさに裏方中の裏方なのである。

そして床山がマゲを結う技術、これはいままで個々の名人芸に頼って、技の継承もなかなか行われなかった。技を教えるにしても相撲部屋、いわゆる一門におけるつながりの中でしか教えられてこなかったそうなんです。まさに一子相伝！

しかし、クオリティの統一ができていないとまずい、ということで、2007 年から、毎年３回ずつ全体での講習会なども開かれるようになったという。つまり、つい最近までは、剣術のように秘儀として伝授されていたというのだから、大相撲おそるべし！

この論文の著者の下家先生は、お相撲さんのマゲが大好きらしく、この論文のタイトルにも「現代に生きるマゲⅢ」とあるように、「Ⅰ」「Ⅱ」をすでに書き上げられている！　ちなみに「Ⅰ」では、「マゲがよく似合う外国人力士」として、マゲが日本人だけに似合うへ

アスタイルというわけではないことを、琴欧州の写真などを載せて主張しておられました。また、「Ⅱ」では、「当代力士着衣事情編」として、マゲによく似合う服ということで着物や浴衣を挙げ、主に琴欧州の写真などを載せて研究しておられました。……もしかして琴欧州好きかよ!?　イケメン力士好きだったりするのかも!?　そういう研究者の人間らしいところが見えてくるのも、論文読みの奥深さである。

しかし今回の論文では、そんなところはなりを潜め、力士のマゲを結う裏方さんに大アンケートを実施し、スポットライトをあてたのであった！

●ぶっちゃけ回答続出！　赤裸々な床山の実態

この論文のアンケートに参加した床山さんたちは、経験 20 年以上の熟練者、計 24 人。なかには、番付表にも名前が載っている特等床山の「床邦」（とこくに）さんと「床寿」（とこじゅ）さんのお２人も入っているそう。ちなみに、床山は特等からはじまって、一等～五等と計６つの階級があり、このあたり、見習い、前座、二つ目、真打、大看板と、経験と実力によって分かれる落語に似てますね。

せっかくだから、いまの美容師さんもこういう階級作っちゃえばいいのに。といっても、アシスタント、スタイリスト、カリスマくらいしかないけど……。

ちなみに、特等の床山さんは勤続 45 年以上、満 60 歳以上の床山さんのなかでも特に優秀な方、あるいは勤続 30 年から 45 年のなかで、非常に優秀な成績の方しかなれないそうです。この論文の執筆時、特等は２人のみなので、下家先生はトップ２人をつかまえたことになる。すごいぞこれは！　平成 19 年時点で、床山さんは 51 人いらっしゃるのだそうです。

アンケートの内容はというと、「はじめてマゲが結えるまでどれくらいかかりましたか」とか「床山になってよかったなと思うときはどんなときですか」といった質問が 17 個並び、その多くに選択肢がついている。

というわけで、質問とその回答をダイジェストでお送りしよう。

▽質問２「床山となった動機とキッカケ」

「とにかく相撲が好きだった」「力士を志していた」という、やはり相撲好きならでは、という回答が上位を占めている。その中で１位に輝いたのが、「知人の紹介」。

知人の紹介かよ！　なんか夢がないよ！　その知人、何者だよ！　「床山やんない？」とか言う人、ふつう周りにいないよ！　その知人、紹介してくれよ！　しかし、特殊な職業に就くには、それなりに特殊な状況におかれないとなれないものなのか、まさに選ばれし職業、それがＴＯＫＯＹＡＭＡ！

しかし、なかには「自分で部屋関係者に連絡を取った」とか「巡業先で関取に紹介されて」というケースもあって安心しました。

ただ、床山になれるのは、「満 19 歳未満の男子」に限定されているとのことだから、人生のかなり早い時期に決断を迫られる職業とも言える。遊びたい盛りの年頃に、「オレは床山になる！」なんてすごい決断だと思いませんか？　19 歳にして知人に運命をゆだねてしまうのもなんだけど、やはり伝統芸だけに、そういう密室性がロマンを生む要因にもなっていると思われる。ちなみに、定年は 65 歳だそうです。意外と手堅い職業だな。

▽質問３「はじめてマゲの結い方を教わったとき思ったのは？」

「むずかしそうだった」が 13 人でやはり一番多かったんですが、「考えている余裕がなかった」という人もけっこういた。反面「意外と簡単じゃないかと思った」と回答した人も４人ほど。

みんな、けっこう正直に答えているな、と思った瞬間、１人だけ「その他」を選んで、「先輩が怖かった」という理由を書いている人が！　言っちゃっていいの!?　アンケートとはいえ！　と、こんなぐあいに、たまに現れる “ぶっちゃけ回答”が、この論文を魅力的なものにしている。かくして私はこの論文のとりこになってしまった……。

▽質問５「はじめて大銀杏を結えるまで、どのくらいかかりましたか？」

この「大銀杏」というのは、十両以上の関取だけが結うことのできるマゲで、先端が銀杏の葉に似ていることから、そう呼ばれている。これを結うには、相応の技術が必要で、桃栗三年柿八年、それなりの時間と経験が必要なのだ。料理の世界でも立派な板前になるまで 10 年以上かかるし、落語家だって真打になるまでは 15 年くらいかかる。

で、回答を平均すると……「４、５年」。４、５年かよ！　少し肩透かしをくらった感はある。

アレ？　回答のなかに、１人だけ「１時間」と答えている人が……。どうやら、結い始めてから結い終わるまでの時間と勘違いしたらしい。おっちょこちょいな床山さんもいるんだなあ、と思うと、何だか癒されました。このような、論文のなかにある清涼飲料水的な癒しポイントを見つけた瞬間こそ、おもしろ論文ハンターとして至福の時である。

あと、どの回答にも「その他　２」とあって、これはなんなのかなあと思ったら、この２名はいつもおなじ人たちのようで、「質問５」に対してそれぞれ「誰を結っても形ができるのに 10 年以上かかった」「今でも胸を張れない」と回答。

いやいや、そういうことを聞いてるんじゃなくて、と思わずツッコミを入れたくなる、教科書的な回答をする床山さんもいた模様。

「一生勉強です」「毎回が勉強です」という職人気質が透けて見える回答も、また味わい深いものである。

▽質問６「大銀杏の見所といったらどこでしょう」

質問の選択肢には、素人が聞いたことない用語がたくさん出てくる。

１）頭へのすわり具合
２）ハケ先の開き
３）ビンの膨らませ方
４）タボの張り出し方
５）髪の毛の流れ
６）全体のバランス
７）その他

ですって！

「ビン」というのは、「頭の左右側面」、「タボ」というのは「頭のうしろの張り出した部分」のこと。みなさんはご存知だろうか？

質問６の回答で一番多かったのは、６の「全体のバランス」で、意外に無難な答えに落ち着いていて、ややがっかり。

考えてみれば、たしかにそうなのだろう。人によって頭の形も髪質も違うわけだから、「全体のバランス」は最重要だろう。そこがまた、職人の腕の見せどころなのだ。

▽質問７「マゲを結ううえで、なにか悩みはありますか？」

１）力士たちの抜け毛、薄毛
２）力士たちの髪質の違い
３）力士たちの協力不足（じっとしていない、姿勢が悪い）
４）頭をよく洗わず不潔な力士
５）手荒れ
６）歯痛（元結を使用することによる）
７）腰痛、肩こり

回答の中で最も多いのは、２の「髪質の違い」で 16 人、その次が７の「腰痛、肩こり」で 12 人。腰痛、肩こりは職業病なのだろう。

意外と多かったのが、３の「力士たちの協力不足」で８人。取り組みの前で気が昂ぶり、じっとできない力士もいるだろう。だれかとしゃべったり、落ち着きがない力士もいるかもしれない。それでも黙々とマゲを結う、これぞ床山の美学！

研究論文におけるアンケートの場合、質問内容や選択肢の立て方がとても重要になってくるのであるが、この“床山論文”の場合、それらの端々に相撲に対する深い理解と愛情

が垣間見える。きっと下家先生は、大相撲が大好きなんだろう。

▽質問 11「髪を結っていて力士の体調、心理面などがわかりますか」

この質問の意図がよくわからなかったのだが、熟練した床山なら、髪に触った瞬間に力士のすべてがわかるかも⁉　という期待の現われなのだろうか。よく、プロ野球のブルペン捕手が、投手の球を１球受けただけでその日の調子がわかるという、アレですね。そこを床山にぶつけてみたわけである。

これに対して、圧倒的に多かった回答は「わかるときとわからないときがある」！

当たり前だ！　なにかを答えているようで、なにも答えていないじゃないか！　プロ野球の解説で「このデッドボールは当たったバッターも痛いけど、当てたピッチャーも痛いですね」というコメントと一緒だ！

ただ、全然わからないわけではなく、一応ちょっとはわかるときがある、というところに、まだ救いがある。

力士の髪を触ったら、ピンとくる人がいたら、その床山は「特等」の床山ということだろう。

▽質問 12「床山としてうれしいとき、床山になってよかったなと思うとき」はどういうときか？

「いいマゲが結えたとき」「大相撲を支えているという意識がもてたとき」「横綱、大関の関取の頭を結ったとき」「自分の結ったマゲで関取の男ぶりがあがったとき」などという答えが大半。

「関取の男ぶり」というのが、いいですね、男ぶりを上げた自分を誇らしく思う、自分が力士だったら、そんな床山さんにマゲを結ってもらいたいな。

少数回答には、

「新聞や雑誌などに写真が載ったとき」

「関取衆や親方にご馳走になったり、有名店などでごしょうばんできること」

「相撲ファンの、社会的にえらい人や有名人と知り合いになれること」などのミーハーなものが！　やっぱりそこは、人間だもの。正直過ぎて好感持てました。

▽質問 14「これまで床山さんとして経験したエピソードは？」

下家先生は質問意図として、ファンが喜ぶ芸術的なエピソードを期待した、と書いておられました。が、「特になし」が大多数！

質問も 14 番目くらいになると、床山さんたちもそろそろ面倒になってきているのかもしれない。がっかりする下家先生！　「わずかに、海外巡業が楽しかったことについて触

れたのが一件のみだった。」と書かかれているのが、心なしか寂しそうでした。　下家先生、涙目！

　得てして、思い通りにいかないのがアンケートである。しかし、想定外の結果が得られるところにこそアンケートの妙味がある。
　下家先生は、床山さんたちの素っ気ない回答について、「書き込みこそ少なかったが」とあっさり触れるにとどめていましたが、最後には、「言葉は簡単ながら、相撲協会の一員としての大いなる自覚と責任感がうかがわれ、深く感動させられた」とフォローしておられました。